

参加作家

2026年1月19日現在／五十音順

	アーティスト名	Artist Name	出身／在住国・地域
1	EAT & ART TARO	EAT & ART TARO	日本
2	スタシス・エイドリゲヴィチウス	Stasys Eidrigevičius	リトアニア／ポーランド
3	遠藤利克	Endo Toshikatsu	日本
4	鬼太鼓座	Ondekoza	日本
5	坂田桃歌	Sakata Momoka	日本
6	鈴木初音	Suzuki Hatsune	日本
7	竹腰耕平	Takekoshi Kohei	日本
8	竹中美幸	Takenaka Miyuki	日本
9	トウ・ウェイチェン[涂維政]	Tu Wei-Cheng	台湾
10	バルトロメイ・トグオ	Barthélémy Toguo	カメリーン／フランス
11	トザキケイコ	Tozaki Keiko	日本
12	西澤利高	Nishizawa Toshitaka	日本
13	橋本雅也	Hashimoto Masaya	日本
14	原倫太郎＋原游	Hara Rintaro+Hara Yu	日本
15	マッシモ・バルトリーニ	Massimo Bartolini	イタリア
16	パンクロック・スゥラップ	Pangrok Sulap	マレーシア
17	ムニール・ファトミ	Mounir Fatmi	モロッコ／フランス、スペイン
18	マデライン・フリン ＋ティム・ハンフリー	Madeleine Flynn & Tim Humphrey	オーストラリア
19	村上力	Murakami Tsutomu	日本
20	弓指寛治	Yumisashi Kanji	日本

※最終の参加作家は、2026年5月に発表予定です。

作家略歴

EAT & ART TARO



photo by Gen Komiya

1979年神奈川県生まれ／東京都在住。調理師学校卒業後に飲食店勤務を経て、料理とテーマに作品制作を行う。おごることしかできないお店「おごりカフェ」や、美味しいおにぎりを食べることを目的とした「おにぎりのための毎週運動会」、地域の女衆が演じながら料理を提供する「上郷クロープ座」、外来種を用いたカレーを提供する「エイリアンフード 島の外来種」などを展開。



《エイリアンフード 島の外来種》瀬戸内国際芸術祭2025
Photo by Shintaro Miyawaki

スタシス・エイドリゲヴィチウス/Stasys Eidrigevičius



Photo by Ignacy Eidrigevicius

1949年リトアニア生まれ／ポーランド在住。キャリア初期には挿絵などブックアートに取り組み、その後、マスク、パステル、テンペラ、インク画、油彩へと表現の幅を広げた。これまでに世界各国で100回以上の個展を開催し、2019年には武蔵野美術大学美術館で個展を開催。2024年には、恒久作品展示ならびに彼の展覧会を紹介する現代美術館「スタシス・ミュージアム」がリトアニアに開館。



《いっしょに／ともだち》瀬戸内国際芸術祭2022 Photo by Keizo Kioku

遠藤利克／Endo Toshikatsu [継続展示／新作]



1950年岐阜県高山市生まれ／埼玉県在住。1970年代より焼成した木、水、土、金属などを用い、〈円環〉、〈空洞性〉等を造形の核とする作品を発表。人間の根源を追求した物質感あるダイナミックな彫刻作品により、80年代後半から90年代初めにかけドクメンタやヴェネツィア・ビエンナーレに出展、北欧と英国で巡回展を行うなど、日本を代表する彫刻家として、国際的にも高く評価されている。



《空洞の庭》南飛騨 Art Discovery 2024
photo by Osamu Nakamura

鬼太鼓座／Ondekoza

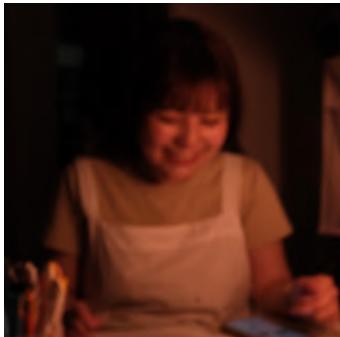


1969年佐渡で結成。1975年、アメリカのボストンマラソン完走後、そのまま舞台に駆け上がり三尺八寸の大太鼓を演奏するという衝撃的なデビューを飾る。小沢征爾指揮ボストン交響楽団の共演など世界各地にて活動。地域芸術祭や自然との共生をテーマにした活動も行う。



《ユーラシアの風》南飛騨 Art Discovery 2024 photo by Osamu Nakamura

坂田桃歌／Sakata Momoka [再展示]



2001年大分県生まれ/東京都在住。故郷での生活を思い出しながら、その記憶をもとに「地図のようなもの」を描く。同じ時代・同じ場所を何度も描き、少しづつ更新していく過程は、道を歩きながら小さな落とし物を探す感覚に似ている。近年では、地域の人々から言い伝えや暮らしの話を聞かせてもらうことで、他者の視点を取り入れながら、個人と場所の記憶を重ねていく制作を行う。



《思い出ばなしをすごした》南飛騨 Art Discovery 2024
photo by Osamu Nakamura

鈴木初音／Suzuki Hatsune [継続展示]



1995年神奈川県生まれ／茨城県在住。植物を育てることを通じて得られる素材を用い、フレスコ技法の一種である「グラッフィート」の技法を用い、自然との共生を作品のテーマに制作を行う。古くから人々が素材を手にし、生きるために加工してきたという事実を追体験し、自身を自然環境へと順応させることを目指す。南飛騨Art Discoveryでは、地域で採取した菊芋、種子、川砂を用いて壁画を制作した。



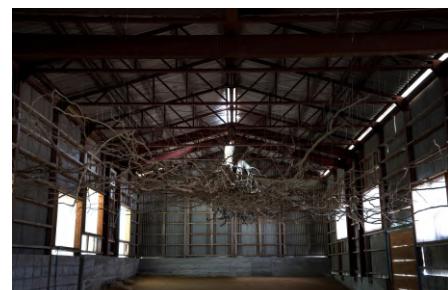
《川と山のあいだ 種まきに歩く人》南飛騨 Art Discovery 2024
photo by 小川大和

竹腰耕平／Takekoshi Kohe



photo by Chukyo Ozawa

1992年生まれ 岐阜県郡上市出身／大阪府在住。京都精華大学大学院芸術研究科立体造形領域修了。木を通して、常に我々を取り囲む循環する流れを意識し、制作を行う。第26回UBEビエンナーレ(現代日本彫刻展)の大賞を受賞。瀬戸内国際芸術祭2016では小豆島のクヌギの木の切り株をその根の先に至るまで手作業で掘り出し、古い倉庫に展示した。



《小豆島の木》瀬戸内国際芸術祭2016
photo by Chukyo Ozawa

竹中美幸／Takenaka Miyuki



岐阜県出身、東京を拠点に活動。多摩美術大学大学院美術研究科修了。透明な素材を用い、光や影を内包する平面作品やインスタレーションを展開。奥能登国際芸術祭2020+(2021)に参加。2023年大垣市スイトピアセンター30周年記念個展(岐阜)、2025年にはVOCA展と同時開催の企画展「竹中美幸—わたしとかなたー」を上野の森美術館ギャラリーにて開催。



《記憶の音》清流の国ぎふ芸術祭2020
提供 AAIC事務局

トウ・ウェイ・チエン[涂維政]／Tu Wei-Cheng



1969年台湾生まれ、在住。考古学とテクノロジーによる複製を融合させ、異なる文明や時代の形態をコラージュし、地域の伝承や現代的な現象を取り込みながら、歴史と現実の間にずれや違和感を生み出す作品を制作。作品を通じ、文化的アイデンティティや情報社会で生じる違和感や不安への熟考を試みる。奥能登国際芸術祭2020十では、歴史と伝説を調査しクジラの骨が出土する考古遺跡を偽造した。



《巨人與巨獸遺跡-義村遺址》2019

バルトロメイ・トグオ／Barthélémy Toguo



1967年カムルーン生まれ／パリとカムルーン・バンジュン在住。2007年、地域及び国際的アーティストの交流拠点となるバンジュン・ステーションを設立。強い政治意識に根ざしたユーモアと挑発性を併せ持つ作品を制作し、彫刻、写真、映像、インスタレーション、パフォーマンス、水彩画など多様な表現を展開。作品はパリ・ポンピドゥーセンターやニューヨーク現代美術館などに収蔵されている。



《Welcome》大地の芸術祭2018
Photo by Keizo Kioku

トザキケイコ／Tozaki Keiko

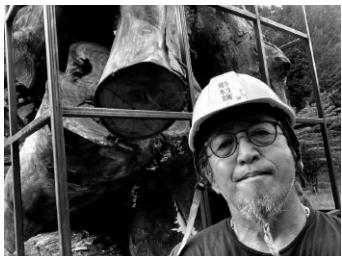


1981年岐阜県岐阜市生まれ／名古屋市在住。愛知県立芸術大学美術学部デザイン科卒業。2007年から枯草や種、米粒や古道具などを使った作品をつくりはじめ、2017年より羽島郡岐南町で「夜明けの美術学校ともしび」の企画運営、2020年より高山市清見町でアートギャラリー「tomoshibi.lit」主宰。現在は名古屋市内に残る森に拠点を移し、自然から感じとった祈りのかたちを求めて制作をしている。



《水の祈り、啓かれる森で》2023
photo by 関谷亮子

西澤利高／Nishizawa Toshitaka 「継続展示」



1965年岐阜県岐阜市出身／神奈川県在住。数多くのモニュメントの制作・発表を行いながら精力的に活動し、近年は芸術祭で大型のインсталレーションを発表。「薄さの向こう側」をコンセプトとしてさまざまな素材による立体作品を制作。オランダやメキシコでも大型彫刻の制作を行う。2020年感染症拡大を機に「狂った距離感」を表現すべく制作素材をアクリルに移し2022年UBEビエンナーレ大賞受賞。



《すべてに魂があって すべての魂はひとつだった》南飛騨
Art Discovery 2024
photo by Osamu Nakamura

橋本雅也／Hashimoto Masaya



1978年岐阜県高山市生まれ／神奈川県在住。創作活動の原点は、2000年にインドの山村の旅路で河原の木片を拾い磨いた際、手を加えることで自然物が内包していたものが表出してくる現象に興味を抱いたことにはじまる。以降、透徹な視線は一貫して素材やモチーフの奥へと向けられ、形を引き出している。近年、鹿の角、骨を素材とし、作家の身近にある草花をモチーフとした作品で注目を集めます。



『flams』2024

原倫太郎＋原游／Hara Rintaro + Hara Yu



子どもから大人まで誰もが楽しめる体験型アートやプレイグラウンドをテーマにした大型作品を全国各地で展開するアーティストユニット。

原倫太郎 | 1973年神奈川県出身、在住。主に動きを伴うインスタレーション作品を制作。原游 | 1976年東京都出身／神奈川県在住。木枠・キャンバス・絵具など、絵画の要素に着目し、絵画のあり方を拡張するような作品を制作。



『阿弥陀渡り』大地の芸術祭2024
photo by Hashimoto Takao

マッシモ・バルトリーニ／Massimo Bartolini



photo by Agostino Osio

1962年イタリア生まれ／在住。1989年にフィレンツェ美術アカデミーを卒業。現在はボローニャ美術アカデミーで視覚芸術を教える。パフォーマンス、彫刻、写真、映像、インスタレーションなど、第60回ヴェネツィア・ビエンナーレ(2024)では、イタリア館代表作家を務めた。国内では、横浜トリエンナーレ(2011)や、越後妻有アートトリエンナーレ(2012,2024)、瀬戸内国際芸術祭(2022)などに参加。



『100 Giorni(100日)』2025, Courtesy San Carlo Cremona and artist, With the support of MASSIMODECARLO, Photo by Form Group - Andrea Rossetti

パンクロック・スゥラップ／Pangrok Sulap



2010年にマレーシア・サバ州ラナウで結成されたアートコレクティブ。名称は「パンクロック」と「農民の休憩小屋」を意味する語の組み合わせ。アーティスト、キュレーター、作家、研究者、活動家、ミュージシャン、グラフィックデザイナー、企業家、工芸家など、多様な背景を持つ表現者で構成され、木版画や音楽を軸に地域コミュニティや社会問題に向き合いながら、世界各地で活動を展開。

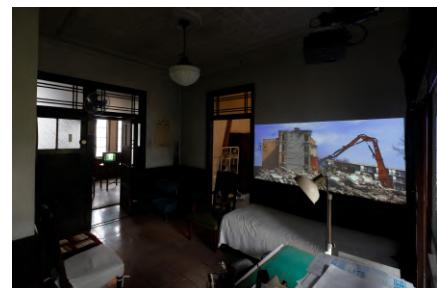


『Flora Fauna』瀬戸内国際芸術祭2025・瀬戸内アジアギャラリー

ムニール・ファトウミ／Mounir Fatmi



1970年モロッコ生まれ／パリ拠点、スペイン・バルセロナ在住。映像、インスタレーション、絵画、彫刻など多様なメディアを用い、アイデンティティ、言語、資本主義、メディア、テクノロジーといったテーマを軸に作品を開発。ヴェネツィア・ビエンナーレ(2007,2011,2017)を始め、数多くの国際的芸術祭に参加。国内では、瀬戸内国際芸術祭(2016,2022)や越後妻有アートトリエンナーレ(2018)に参加。



《実話にもとづく》瀬戸内国際芸術祭2022
Photo by Keizo Kioku

マデleine・フリン＋ティム・ハンフリー／Madeleine Flynn & Tim Humphrey



photo by Jody Haines

オーストラリア生まれ、在住。聴覚を軸に予期せぬ体験を生み出すアーティスト・デュオ。人間と人間以外の存在(自然や環境)における「聴くこと」への関心を起点に、参加型プロジェクトを通して制作を行う。近年は暗闇の音響や、人類の未来に関わる危機、創作が生態学的・文化的に及ぼす影響を探究し、メルボルンを拠点に活動している。



《PIVOT》 Brighton Festival 2018, Credit Brighton Festival

村上力／Murakami Tsutomu



1961年東京都生まれ、在住。彫刻を中心に、人の姿や歴史上の人物をモチーフとして、記憶や時間、身体とは何かを問いかける作品を制作している。確かな具象彫刻の技術を基盤に、複数の像や空間全体を用いた展示を行い、鑑賞者の見方や立ち位置に変化をもたらす。教育現場での経験を制作に生かしながら、現代彫刻の表現を探り続けている。



《学校》2024

弓指寛治／Yumisashi Kanji



photo by 坪野節子

1986年、三重県出身／東京都在住。「自死」「慰靈」「福祉」をテーマに制作を続ける。2021年より「満洲國」を手がかりに、戦争の記憶や語られ方を問い合わせ直すプロジェクトを開発。2024年、国立西洋美術館にて路上生活者と支援者との関係性を起点とした作品を発表。昭島市立光華小学校に通い、戦争の記憶をめぐる制作とリサーチを行った。



《民話,バイザウェイ》南飛驥 Art Discovery 2024 Photo by Osamu Nakamura